

国際共同研究会のみなさまへ

ごぶさたしております。昨年の天安の研究会では、私の報告故に、いろいろご心配をおかけして、申し訳なく思っております。

さてあの場の議論に基き、昨年10月18日、「強制連行された日本軍「慰安婦」問題の正しい解決のための市民連帯」がけっせいされました。あの研究会に参加された韓国側の方々が中心になられたのです。ところで、本年1月アジア女性基金は基金の提案をうけいれると連絡された韓国のハルモニ7人の方々に基金の事業を開始しました。その折、「市民連帯」が出された声明に不安を感じて、私は池明鏡、呉在植、金ソングェの三先生にお手紙を出しましたが、お返事はいただけませんでした。

その後挺身隊問題対策協議会のニュース「消息」3月24日号に「市民連帯結成」の記事がのり、首をひねらざるをえませんでした。無署名の記事ですが、そこには次のようにあります。

「特に、市民連帯の結成に知識人が多く参加しているのには、国民基金発起人である和田春樹氏の功績が大であるといえる。和田春樹氏は去年の8月5日から7日まで天安の韓国神学研究所で開かれた「東アジア平和のための知識人連帯」セミナーに日本側代表として参加した。彼は、発表の中で、東アジアの現情勢を打開できる一つの方案として「国民基金」を提示した。その上で、日米安保条約が東北アジア地域で安全保障理事会のような役割をしなければならないなどの日本軍国主義的な立場をあらわにしたのである。これによりアジアから参加した学者及び市民団体代表たちと韓国の参加者たちが問題意識をもつようになり、韓国の良識ある知識人たちは東アジアの平和のためには「国民基金」方式ではなく、法的な賠償をつうじて解決されるべきであるとし、そのための募金活動を始める決意を固めたのである。」

私が「軍国主義」の立場に立っていないことは、ご出席のみなさまがよくお分りのことと思います。私はあの研究会の韓国側主催者の介入に期待しましたが、何も起こりませんでした。

5月28日「市民連帯」の解散にあたって配布された宣言文と「ハルモニへ送る手紙」を読んで、また大きな衝撃を受け、わたしは高崎さんとともに、韓国の友人への手紙を書きました。このさい配られた文書の中に「経過報告」があり、

その8月6日の項には、次のようにあります。

「『東アジア平和のための知識人連帯』国際セミナー（天安韓国神学研究所主催）で日本代表和田春樹氏（国民基金発起人）が「日本の『国民基金』が東アジアの現情勢を打開しうる一つの方案だ」と発言した。ここに参席した挺対協代表と他の参席者たちが反発し、『国民基金』に対応するための一つの方案として、わが国のハルモニに対して慰労金をわれわれが募金してあげようという論議が具体化した。」

問題がわれわれの地域の相互理解と協力の焦点となっており、この問題の解決なくして、日韓の知識人の連帯も宙に浮いてしまう以上、研究会もこれから避けることはできないわけですが、不当なレッテルなりを政治的目的のためにするようなことを許してはいけないと思います。対立があるからこそ、対話が必要です。研究会というものはそのためにあるのではないのでしょうか。その意味では、韓国の先生方から、私の最初の手紙にお返事がいただけなかったのは、天安で再確認できた友情に照らして、残念です。みなさまにも手紙の写しをお目にかけないでしま^したのは、私の心の動揺のゆえです。しかし、7人が除去されたという非常事態に強い危機感をもちましたので、鈴木先生のところに資料をお送りすることにしました。

よろしく。

1997年6月5日

和田春樹

韓国の友人への手紙

みなさま

お変わりなく、お元気のことと思います。私たちも引き続き、大学での研究教育に従事しながら、日本人と韓国人のよりよき関係を願って、「女性のためのアジア平和国民基金」に参加しています。

さて、このたび、5月28日韓国の「強制連行された日本軍“慰安婦”問題の解決のための市民連帯」が事業を終了し、解散したとの報に接し、私たちは強い衝撃を受けました。黙って通り過ぎることのできない深刻な事態ですので、韓国の友人のみなさまにお手紙を書いて、私たちの考えを申し述べさせていただく次第です。

解散にあたって「市民連帯」は「宣言文」と「ハルモニへ送る手紙」という二つの文書を発表されました。まずこの第一の文書において、これまでの活動をふりかえられて、「いまだ日本政府は、このような国際世論を無視したまま、公式謝罪と法的賠償を回避しており、“国民基金”を通じて慰労金を支給することによって、この問題を終わらせようと、猛烈に活動している」と総括しておられます。日本政府は公式謝罪していないとのご主張は、日本国内閣総理大臣として、「慰安婦」とされた方々に対して「お詫びと反省」を表明した橋本総理の手紙は公式謝罪とはみとめないというお考えなののでしょうか。基金の申し出を受けとめられた7人のハルモニはこの橋本総理の手紙に意味を与えて、受け取られたのですから、この手紙を無視するということは、のちに指摘することとの関連で大きな問題だと考えます。

こうした総括に立って、「宣言文」は、「市民連帯は、この間日本軍“慰安婦”問題解決のための活動を継続してきた韓国挺身隊問題対策協議会を支援し、日本の“国民基金”を防ぐための一時的目的で結成された。われわれはこの間募金した国民誠金を去る1月日本の“国民基金”を受け取った被害者7名を除外したすべてのハルモニに一齐に支給して、市民連帯を解散することにした」と明らかにしておられます。このくだりこそ私たちに大きな衝撃をあたえたのです。

「国民基金」の申し出を受けとめて下さったハルモニ7名はなぜ「市民連帯」

の支給から除外されるのでしょうか。昨年天安の韓国神学研究所で開かれたシンポジウムの席上、和田は報告の中で「慰安婦」問題の解決について触れ、高齢のハルモニたちの事情を考慮すべきであると主張し、「アジア女性基金」の申し出を受けとめたいというハルモニが出てきたら、認めてほしいとお願いしました。参席した方々の討論の中から、韓国国民の募金のご提案が出て来たと記憶しています。そのとき休憩のさい、「アジア女性基金」の募金とこれから集める韓国国民の募金を、一つにあわせることはできないのかという意見をうかがいました。

日本国民の募金は被害者に対する謝罪と償いの気持ちからなされるものであり、韓国国民の募金は苦しんだ被害者を慰め、励ますためのものだとなれば、性格が違いますが、被害者のもとでは一つになりうるものだと思います。

日本軍のもとで「従軍慰安婦」にされて苦しみを受け、戦後45年間まったく無視と沈黙の中に苦しみ続け、過去5年間名乗り出て、自己回復のために戦ってこられた方は韓国では158人おられます。そのうち、日本から受け取った7人を除いて、151人に支給するという決定は、7人の人々は誠金を受ける資格のない者だとのレッテルをはりつけ、差別することになります。

「ハルモニへ送る手紙」の方では、「謝罪のない、賠償金ではない慰労金を受け取ることにより、日本政府に免罪符を与え、われわれ自ら二度も金で売られた奴隷になる」ことは許されないと述べられています。これは7人のハルモニに

「二度も金で売られた奴隷」というレッテルをはりつけることに他なりません。

挺身隊問題対策協議会代表の□貞玉先生は本年2月27日に「市民連帯」主催の国際セミナーでの発題講演の中で、「罪を認めない同情金を受け取ったら、被害者は志願して出て行った公娼になる」とお述べになりました。それを読んだとき、そのように決めつけられたハルモニたちのことを思って、涙が流れましたが、このたびも驚きを通り越した悲しみを覚えました。

さらにこの「手紙」は、7人のハルモニには誠金を支給しない理由として、誠金は「国民基金」に反対する「幼稚園児の・・・誠金から小、中、高、大学生、全国のシスター、信徒、その他多くのわが国民がわが民族の自尊心とハルモニたちの名誉回復を祈る心から送ってくれたものだから」だと述べておられます。幼稚園児や小学生が7人を除外する論理を理解するとは思えませんし、またシスターたちが7人を排除することを当然視するとも信じられません。

さらに日本からこの募金に加わった人々は、「国民基金」に反対する人々であっても、7人を除外するという決定を支持するとは思えません。

「手紙」は続けて、「アジア女性基金」の申し出を受け入れないハルモニたちについて「わが民族の自尊心」だと述べておられますが、これから7人のハルモニは「民族の自尊心」を傷つけた存在だということになるのでしょうか。

「アジア女性基金」の申し出をうけられた7人のハルモニたちは、日本国総理大臣の「お詫び」の手紙を受け取られ、それによって名誉回復のミニマムの前提がえられたと判断なさったのです。日本政府は、「従軍慰安婦」問題に付いての自らの責任をいっさい認めなかったのですが、過去5年間のハルモニたちの運動や韓国及び世界の諸団体の活動、そして日本内部の努力によって、はじめて道義的責任をみとめ、お詫びと反省にたって、「国民的な償い」の事業をするにいたったのです。これはハルモニたちがかちとった重要な成果です。これではなお不十分だと考える方々がおられることは理解できますが、これを成果だと考え、日本政府と国民の誠意を評価するという立場をとられたことが、韓民族の自尊心を傷つけるものとは思えません。まして金をうけとって「奴隷」の立場に身を置いたとの非難をうけるはずありません。

総理大臣の手紙とともにお渡ししたアジア女性基金理事長の「手紙」には、基金が「償い金」をお送りする意味を次のように説明しています。

「もとより謝罪の言葉や金銭的な支払によって、貴女の生涯の苦しみが償えるものとは毛頭思いません。しかしながら、このようなことを二度とくりかえさないという国民の決意の徴として、この償い金を受けとめて下さるようお願いいたします。」

「貴女が申し出てくださり、私たちはあらためて過去について目をひらかれました。貴女の苦しみと貴女の勇気を日本国民は忘れません。」

日本に対する深い恨が韓国民の心をみたしていることは理解しています。しかし、どうかハルモニたちとあなた方の努力が日本に呼び起こした変化を全体的に評価して、これまでの恨を7人のハルモニを責める方向に向けないで下さい。

「ハルモニへ送る手紙」は、被害者のハルモニたちに「日本の金をしりぞけ、最後までわれわれの要求を叫ぶ」ように呼びかけ、そうすれば、ハルモニたちの「名前は、歴史に堂々と記録され」、「いまでも世界の各地で組織的な強姦をうけ

ている被害者に大きな力になり、そのような犯罪を終息させるのに大きな役割を果たす」ことになる」と述べています。

✓ ハルモニたちが闘争を続けていかれることについては、私たちも敬意を表します。しかし、名乗り出て日本国家を告発したというこれまでの行為によって、ハルモニたちの名前は十分に歴史に記録されるのだと思います。今日の世界に起こっている犯罪を克服することはハルモニの力を借りずに新しい世代の努力でなすべきことだと思います。

もしもハルモニたちに対して、これからも聞いつづけ、要求を貫徹せよと求めるのであれば、どうして「市民連帯」を解散されるのかがわかりません。お金を集めて渡すということは決して単純なことではありません。ましてこのような複雑な状況の中で、151人に支給して、7人にはレッテルをはって支給を拒否したまま、組織を解散するということはこののちに起こる事態に対して責任を回避することになりませんか。

私たちは、これからでもいいですから、7人のハルモニに対する態度を改めて、支給をしてくださるように「市民連帯」に関係されたすべての方々にお願いしたい気持ちです。これはお金の問題ではありません。あのような苦しみをなめてきたハルモニたちの名誉と尊厳を尊重し、この人々も民族の懐に抱き取ってほしいのです。

私たちは日本の政府と日本の国民の努力が不十分であることが、かかる事態を招いた原因の一端となっていることを、もちろん重く自覚しています。私たちになにか新しくできることはないか、考えていくつもりです。

1997年5月30日

和田 春樹

高崎 宗司

池明観先生
呉在植先生
金ソングェ先生

ご無沙汰しております。天安の韓国神学研究所でのシンポジウムでお世話になりましたあの8月はじめの日々から5カ月がすぎました。この間は私たちは二人の先生を失ってしまいました。

あの折帰国すると、中嶋正昭先生からご自身の病状を説明したお手紙が届いておりました。すぐに昔の友人とともに、清瀬の救世軍病院にお見舞いしました。私は天安の祭まりのことをお話し、中嶋先生は昔と変わらない調子で話していただきました。それが最後のお別れになるものと覚悟はしておりましたが、本当に早く中嶋先生は去って行かれました。先生の死にあたって、私たちは先生のお働きでキリスト者と市民の協同の時をもったことの大きな意味をあらためて考えました。

それから思いもかけなかった安炳茂先生のご急逝の報に接しました。三回の東アジア連帯シンポジウム、その前の民衆神学のシンポジウムーご一緒させていただいた機会の度毎に、先生の変わらぬ温顔にいつも強いはげましをいただいたことをありがたく思い出しました。「東アジアの連帯」は先生がわれわれみなに残していかれた重い課題であると考えます。

先生方にとりましては、お二人の死はさぞつらいことであったと拝察いたします。
서러해요?

さてあの天安でのシンポジウムの席で、「従軍慰安婦」問題についての私の考えを聞いて下さったことを感謝しております。挺身隊問題対策協議会の尹貞玉先生、尹美香さんと一つ席で討論できたことも先生方のおかげと、ありがたく思っております。その折も申し上げた通り、私は「従軍慰安婦」問題を社会問題化するのに挺対協と尹先生が果たされた役割に対し感謝しており、そのご努力には敬意を払ってきました。しかし、1995年7月以後は挺対協は基金の関係者の面会の要請に拒否の態度をとっておられます。そして、その夏は基金の訪韓団の行動について挺対協が新聞社に送った文書をめぐって対立が生じたあとでした。ですから、いっそう同席して、お話しができたことはキリスト教会の先生方のおかげと感謝した次第です。

その折私は、日本政府の用意している総理大臣の手紙は基本的に他人だ、誠意あるお詫びの手紙となっております、道義的責任の認識に基づく基金の償いの事業は今日の日本の状況ではぎりぎりの内容であって、これ以上には当面進めないものであることを理解して下さるようお願いしました。そして挺対協への敬意にもかかわらず、被害者団

왜 연회거부?
왜 그랬어?
왜 그랬어?
왜 그랬어?
왜 그랬어?

왜 못해?
기안부준제
타이제문제
하

体ではない挺対協は被害者を代表することはできないが故に、基金
としては被害者に直接お目にかかり、その声を聞くように努力する
つもりであると述べ、韓国の被害者ハルモニの中から、基金の提案
を不十分なものではあれ、受けとめると言われる方が出てきた場合
は、フィリピンのリラ・ピリピーナと同じく、それを認めてほしい
とお願いしました。

それに対して尹貞玉先生は、基金は一見前進しているようだが、
結局は賠償金を出さないという以上、日本は変わっていないのであ
り、受け入れることはできないと言われ、尹美香さんは右翼とも天
皇制ファシズムとも関わらず、国家賠償は無理だというのは敗北的思
考だと批判されました。残念ながら、私はお二人のご批判を受け入
れることはできませんでした。

聞いておられた先生方からは、韓国の被害者の生活を考えて、国
内で募金をするという考えが出されました。最後のまとめの会議で
そのことが提案されましたとき、私も賛成いたしました。ハルモニ
の生活を考えれば、韓国の内部からの援助金が集められるというこ
とはよいことに思われました。ただ会場の外で参加者のお一人から
日本国民から4億円が集められたのは大変なことだ、これと韓国の
募金を合わせるように設計できないものかとのご意見をうかがい、
そうでありたいものと思いました。先生方の中には橋本首相の靖国
神社参拝に対する反発が強く、この内閣のすることは信用できな
い、だから基金は受け入れられず、日本には戦後補償法の成立を要
求していきたいとの考えが一般的であるようでした。お気持ちは
わからないわけではありませんが、東アジアの平和のためには日韓
両国の国民も政府も協力して行かなければならないのですから、

「従軍慰安婦」問題で対立したままになることをどのように回避す
るのかは、双方から考えねばならない問題であるように思いました。

帰国後、フィリピンで基金の事業の開始があり、首相の「お詫び
の手紙」が発表されました。この手紙では、たしかに「従軍慰安婦
問題は戦争犯罪だとして、法的責任を認めることはしていません。
しかし、「軍の関与の下に、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけ
た」と認め、「道義的責任を痛感し」て、「日本国の内閣総理大臣
として」「心からおわびと反省の気持ちを申し上げる」と述べ、

「過去の歴史を直視し、正しくこれを後世に伝える」ことを表明し
ています。これは被害者お一人お一人に対する日本国家の正式の謝
罪です。しかし、韓国ではこれはそのようなものとしては受け入れ
られなかったようです。10月になって、先生方が中心となって、
挺対協とともに「日本軍により強制進行された慰安婦問題の正しい
解決のための市民連帯」をスタートなさいました。呉在植先生が常
任代表になられ、金ソングェ先生が執行委員長に就任され、池明観、

橋本の内閣の責任

対外的責任

内閣の責任

なぜ戦争犯罪の責任

どうする? 国が

どうする? 国が

どうする? 国が

姜万吉、姜文奎先生らも顧問になられたのでした。みなあのシンボウジウムに参加された先生方です。

「市民連帯」の募金活動が始まると、すぐに、この募金からの援助金はアジア女性基金の事業を拒否するハルモニにのみ与えられるという話しが伝えられました。私はそれが先生方の真意であるはずはないと思いましたが、不安になりました。もしもそのようにされるなら、結果的に援助金が政治的に使われ、ハルモニを差別することになってしまいます。日本の募金と韓国の募金是对抗的なものとなる不幸な事態が招来されます。そのようなことはないといことを一度うかがいたいものと思いましたが、そのままに時をすごしておりました。

そうこうしているうちに、12月になりました。月のはじめに「金田君子」（仮名）と名乗っているハルモニが日本で基金事業の受けとめを公然と表明され、12月16日に基金理事長にその旨を伝えたお手紙をよせられました。つづいて24日にはさらに6名のハルモニが同じ趣旨の手紙をよせられました。

基金としては、被害者の方が基金の事業を受けとめることを表明されれば、ただちに事業を開始することを原則としておりました。高齢の方々です。いつ不意の死が訪れるかも知れません。フィリピンでは8月以来9人の方に事業が実施されましたが、うち2人の方はすでにこの世を去られました。韓国でも文玉珠さんの死はわたしたちの焦慮をかきたてておりました。

もとより「従軍慰安婦」という存在は日本の植民地支配のもっとも過酷な帰結なので、韓国政府と国民がこの問題に対する日本国家の態度に強い関心をもたれるのは当然のことであり、挺対協をはじめとする韓国の関連団体が熱心に運動し、提言してくださったことはよくわかっています。しかし、問題は基本的に被害者であるハルモニ個人に対する日本政府と国民の謝罪と償いの事業なので、あくまでも一人一人のハルモニのお気持ちが大事です。だが、挺対協などの関連団体が反対し、韓国の世論がそれを支持しているなら、その中で被害当事者が受け取りを希望することは、極度に苦しいことです。現実におこったことはそういうことでした。金田さんが基金事業の受け入れを表明されると、太平洋戦争犠牲者遺族会から非難の声明が出され、金田さんには受け入れるなという働きかけが強くなされたと聞いています。むしろ事業開始が遅れることが受け入れを表明された方にとってより深刻となる様相を呈しておりました。

私は昨年夏吳先生に対して受け取りを表明するハルモニが出たら、先生方にご相談する、認めようと言っただけなければ、実施は難しいと申し上げました。しかし、「市民連帯」の代表であられる

先生にご相談することはできませんでした。基金は状況を総合的に考えて、ただちに事業の開始を実行することを決定しました。ただ韓国政府のお立場に配慮して、できるかぎり静かに、ひかえめに事業を行うことにしたのです。関係団体に事前にお知らせしなかったことはやむをえなかったと考えています。

このたびの基金の事業開始に対して、韓国の中では強い反発が見られましたのは覚悟の上でありました。しかし、挺対協と「市民連帯」が出された1月13日付けの共同声明を拝見して、衝撃をうけました。声明は、基金の事業開始を「金銭で被害者を秘密に買収する工作を行った」ものと非難しておられます。ここにはすべてを金銭に還元して考える見方があらわれています。基金の訪韓団は事業を開始した11日にソウルのホテルからマスコミ各社に団長金平輝子名の「お知らせ」を送りましたが、そこに述べたように、私たちはこのたびの被害者ハルモニの申し出を次のように理解しています。

「本日アジア女性基金の事業を受け入れられた7名の方々は、かつて日本軍の要請等により設置された慰安所で『慰安婦』にさせられ、癒しがたい苦しみを経験され、戦後45年間無視と沈黙の歳月の中に生きられ、過去5年間は日本の行為を告発し、謝罪と補償を求めてこられた方々です。その方々が日本国総理の手紙と基金理事長の手紙を受け取って下さったことは、この間の日本政府と国民の認識と反省、お詫びと償いの意思を不十分ではあれ評価できるものと認めて下さったものと思っております。苦しみを受けられたハルモニたちの登場と告発があったればこそ、私たちは過去について目をひらかれ、ここまで変化することができたのであります。」

ホテルの式にいられた5名のハルモニは、総理大臣のお詫びの手紙が朗読されると、涙を流しておられたと聞いています。私たちはハルモニたちが総理の手紙を名誉回復として受けとめられたと考えます。ですから、「お知らせ」はつづけて、基金の私たちとしては「『従軍慰安婦』問題について、お詫びと償いが必要であるとの考えがますます（日本）国民全体のものになるように努力するとともに、あらたな資料を発掘し、真実を解明するために事業を展開してまいります」と誓ったのです。

挺対協と「市民連帯」の共同声明がどんなに私たちを非難されても、それはしかたがないことです。だが、基金が「買収工作」をしたということはハルモニたちの行動は自分の判断によるのではなく、金銭に目が眩んだ、買収された結果だということになり、ハルモニたちをさげすむことになってしまいませんか。そして声明は「さる11日、日本の『国民基金』を受け取った被害者たちの行動は正しくなかったと評価せざるを得ない」と述べておられます。ハルモニたちの行動は正義に反するのでしょうか。それはいかなる

根拠に基づく判断であり、そのように被害者を裁く権利は誰から与えられているのでしょうか。民族の立場からそう言えるというお考えかもしれません。しかし、ハルモニたちは一人の人間としてその主体性を尊重されるべきであります。

昨年のクリスマスの日、私はひさしぶりにクリスマスの意味を考え、1980年のクリスマスのことを思い出しておりました。金大中氏や文益煥先生たちが全斗煥將軍のクーデターで軍法会議にかけられ、金大中氏は死刑判決が一審も二審も出るという状態で迎えたクリスマスでした。私たちは韓国問題キリスト者緊急会議の中嶋先生たちとともに「金大中氏のためのクリスマス」というきさやか集まりと行進を行いました。その集まりで私は安炳茂先生の「未来のクリスマス」という文章から次の美しい言葉を引いて、私たちの希望を表現したのでした。

「したがって、この聖誕の詩は、過去のクリスマスを追憶したのではなく、これから来るであろう、未来のクリスマスを待つ、信仰の詩なのである。真の聖誕祝賀は、過去を記念するものであっては意味がない。それは、これから来るであろう、未来のクリスマスを先取りする祝賀でなければならない。」

未来のクリスマスの光の中で、捕らわれている人々が自由になり、辱められている人々には名誉が回復されなければならないわけです。ベスレヘムの馬屋で銅い槩桶の中に生まれたイエスの誕生日に私が思ったのは、金田君子と名乗っている韓国のハルモニの心情でした。

8月の天安のシンポジウムでの報告で述べましたように、私は「東北アジア共同の家」を追求すべきだとますます考えており、その中心には韓国、韓民族が立ってほしいと切望しています。しかし、そのためには韓国は日本の協力を必要とします。共同の家をめざすことは北朝鮮をめぐる事態の打開と日本に対する韓国中国の不信の解消なくしては不可能です。ところで韓国は革命の国ですが、日本はあいまいな改革の国です。歴史的に形成されたこの違いを呑み込んだ上で、日本が前進できるように助けてほしいのです。批判と激励の結合によって助けてほしいのです。

1997年1月25日

金田君子